Shukugawa Gakuin College

制作概要

2000年８月10日より９月10日まで［ミラス国際彫刻シンポジュウム］が開催され、日土彫刻家協会の招聘を受け、参加した。

彫刻シンポジュウムは、開催される地に作家が集まり、芸術、文化について討議すること、又、市民に彫刻制作の過程を公開し、作品を提供することで彫刻理念を伝え、文化的な交流をはかることが目的とされる。

今回の開催地であるトルコ共和国ミラス市には、近郊に古代ギリシャ・ローマ時代の遺跡が数多く残り、長い歴史の変遷を彷彿とさせる。更に、博物館・美術館も充実、古代文明の偉大さをよく伝えている。

トルコ共和国はそれらの文化遺産の地に、後から入ってきた遊牧的民族であり、多民族国家である。そのため、異種多様な文化概念を融合させるに至っておらず、国の近代化の遅れの要因にもなっていることを自覚している。ミラス市はそれらの状況を踏まえ、このシンポジュウムを開催することにより、未来に向けて新しい文化理念を創造し、市民に伝えることと、現在も産出する、過去の文明を支えてきたとも言える大理石を有効活用する加工技術、表現技法を期待していると考えられた。

トルコ人作家５名、日本人作家５名と40名を越すスタッフはその課題に答えるべく討論を重ね、制作し、作品として景観と調和するよう設置した。また、多くの市民と40日間に渡り、様々な交流がなされたことを、喜びとしている。

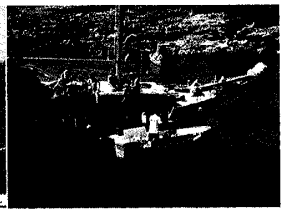
北野 正治

「光の中　街を歩く」
ミラス国際彫刻シンポジュウム

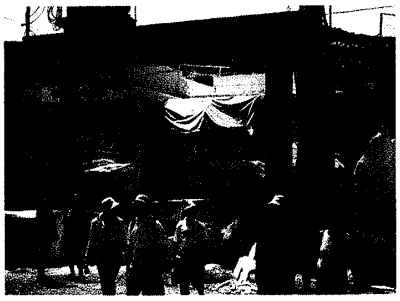
NII-Electronic Library Service

シンポジウム歓迎レセプション
古代ギリシャ・ローマの遺跡前で
トルコ共和国の各民族舞踏が紹介
される。

繊細にして華麗、シンポジウム
会場周辺には、驚くべきほど質の
高い遺跡が点在する。
有名な古代都市エフェスは、現代
の都市計画にも、その文明の光を
投げかける。



エーゲ海の最南端ボドルム港
歴史遺産・自然環境は観光資源として
世界のトップクラス。



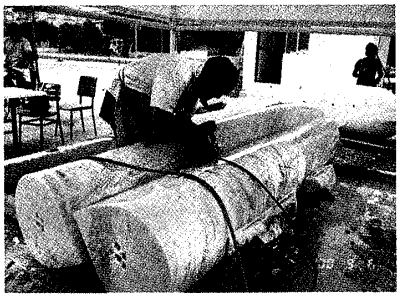
［切削］
図面により、工場で石取を
する。これで予定の変更は
できない。日本人通訳はい
るが専門性が高く、四苦八
苦。

［レッカー移動］
切削工場からシンポジウ
ム会場に石材の搬入。
傷がでたり、大理石の紋様
が気に入らなかったりした
ら差し換え、また遅れる。

［採石］
ミラス近郊には多くの大理石採石場が
ある。縦穴と横穴をつなぎ、ワイヤー
を通す。ワイヤーは環状にされ、引き
ながら回転して石を切る。

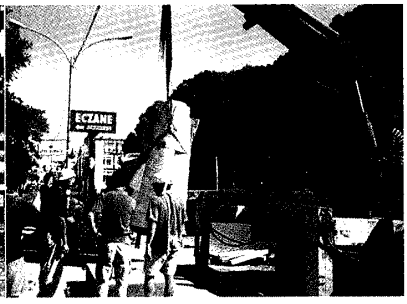
シンポジュウム参加メンバー
日本人作家５名、トルコ人作家５名、スタ
ッフ、学生、総勢40人を越す大所帯。
この写真は、ほんの一部。

［荒取］
ダイヤモンドブレードで切
削し、玄能（ハンマー）、
鑿、コヤスケで削(はつ)る。
ドイツ製、トルコ製、日本
製の電動機器や道具が混在
する。

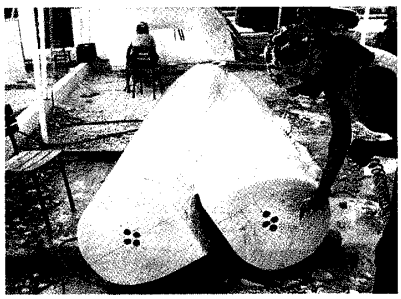


［研磨］
セラミックレジン400番で
エアーポリッシャーによる
研磨作業、後は手作業、サ
ンドペーパー600番、800番
で表面処理で、完了。

［ボス］写真左
イスタンブール、ミマールシナン芸術大学
彫刻科教授フェリト・オズシャン氏。
オルガナイザーとして様々な問題を抱え込
んだが、さすがタフな人物、乗り切った。



［据え付］
経験豊かな作家が集まり、慎重な据え付け
作業。42度を越えた気温も、この頃は凌ぎ
やすく、快調のままに終了。安堵の声が聞
こえる。



［仕上げ］
シンポジュウム作品は個人
制作を越えた在り方。
ミマールシナン芸術大学学
生と本学美術・デザイン学
科専攻科学生７名が参加。

［作品］
山の姿、樹木の形、空の色、全て異なる地
で、現代彫刻の概念がほとんど無いトルコ
市民の前に、個性ある作品が出現。若干の
危惧もあったが、すんなり受け入れられた。

［作品］
彫刻の目的も多様であり、写真の作品は今
回のシンポジュウムの解答の一つであろう
と思われる。
作品はすでに機能している。

NII-Electronic Library Service

北野　正治

トルコ共和国　ミラス国際彫刻シンポジュウム作品

2000年8月10ー9月10日

ミラス産大理石

240×90×130cm

NII-Electronic Library Service